

兵庫・須磨^{すま}アルプスを歩く

10月3日曇り。大和高田の自宅を早く出立、JR 山陽本線で一旦垂水駅まで行き、山陽電鉄に乗り換えて逆行し、須磨浦公園駅で下車。

都会の中に突き出した六甲山地

神戸市は大阪湾と六甲山に挟まれた街だが、その六甲山地は南端で海に向かって伸び、神戸市街を分断する山脈となっている。その半島状の先端山地が「須磨アルプス」と呼ばれている。

親しまれている“ご当地アルプス”

「〇〇アルプス」と呼ばれる山地は日本全国にたくさんある。もともと「アルプス」と言えば、マッターホルンやモンブランなどの名峰を擁し、世界中の山好きや観光客が訪れるヨーロッパアルプスのことなのだが、明治時代に来日した英国人鉱山技師ウィリアム・ゴーランドが日本の本州中部山岳地帯を日本アルプスと名付けたのに始まり、全国各地の山脈や山地、連山が「〇〇アルプス」の通称で呼ばれるようになった。

もともと日本名の山名があるのにアルプスの名を冠するのには賛否が分かれる所だろうが、これまた全国各地の「ご当地富士」と共に、地元や山好きの人々に親しまれている。

そして、今や山梨県の「南アルプス市」のように行政区の名称にまで「アルプス」の語が登場するようになった。

山が海に迫った狭隘の地・須磨

この六甲山地の先端は急傾斜の崖地となって海側に切れ落ち、海と山そして淡路島を望める景勝の地・須磨の浦として名高い。また、ここは隘路(あいろ)となっており、今でもこの隘路に JR や私鉄の線路、自動車道がひしめき合うように走っている。古来西国路を抑える須磨の関がここに置かれたのも、なるほどと思わせる地形だ。平安末期、敗走する平家の軍勢が、ここに陣を構えて源氏軍を迎え撃とうとしたのも、この地形だからだろう。

長い階段を昇って鉢伏山へ

須磨浦公園駅前を 8:40 出発。海に向かって切れ落ちた斜面が須磨浦公園となって、雑木林の中を

↑ 旗振山茶屋前で 長い階段がジグザグに上っている。ここが六甲全山縦走路の西の入り口なのだ。9:20 ロープウェイ鉢伏山上駅着。

さすが、旗振山(はたふりやま) ならではの眺望

9時40分旗振山(253m)に。ここにある旗振茶屋は営業しているようだ。茶屋の下
の展望広場からは四囲が見渡され、明石海峡大橋と淡路島も見えている。この山は江戸時代中期から大正時代まで続いた「旗振り通信」の中継場所として知られている。平野部に突き出した山稜先端のピークだけに見晴らしもいいし、他からもよく見えただろう。ここを中継して送られる大阪・堂島の米相場が西国の商人たちを一喜一憂させたに違いない。かつて日本中を騒がせたニュースの送受信の基地では、今、数人の人々が静かに絶景を楽しんでいた。

美しい蛇に会おう

歩いていて美しい蛇に会った。体長 1m 未満。赤みがかった茶褐色で薄い黒の横スジが入っている。カメラを取り出しているうちに、木の根っこの穴に潜り込んでしまった。意外と素早いごきだった。

多分ジムグリと言う種類だろう。

源義経“鶴越(ひよどりごえ)の逆落とし”の現場に



↓ 旗振山からの眺望 海は大阪湾、島は淡路島 右端に明石海峡大橋が写っている。





雑木林の中を進んで 10:00 鉄拐(てっかい)山着。中国の仙人の名を冠したこの山は、平安末期の源平合戦で源義経が鶴越の逆落としの奇襲で平家軍勢を討破った場所としても有名。

ウバメガシの多い林の中を進むと眼下に団地が広がる広場に出た。ここが「おらが山」だ。沿道には下界の公園並みの花が並んでいるが、それらに交じってハギやヒガンバナも花を咲かせていた、

開発・埋め立てのために消された山

標高差 100mの急階段を降りようとしたら、二人の高齢男性から「その道は危ない。こちらの道で降りた方がいい」と助言を受け、その一人が「一緒に降りましょう」と迂回路を案内してくれた。降り立った所が高倉台団地だ。

ここには 50 数年前まで高倉山(291.5m)という山があつて、連峰の一部を形作っていたが、1971年以降、切り崩され、



その土砂はベルトコンベアで海まで運ばれ、臨海工業地帯やポートアイランド開発の埋め立てに使われたのだ。

見上げてため息が出た長い、長い階段

こうして須磨アルプスは途中で「下界」に降り、住宅団地の中を通ることになる。

団地を突っ切って横尾山の登りにかかる。標高差 140m・400 段 ↓油断ができない岩場、くさり場の連続。「馬の背」

のコンクリート階段がまっすぐに続いている。どなたかの文中に「空まで続く階段」のくだりがあったが、私も見上げて思わずため息を漏らした。

岩場、鎖場が続く「馬の背」

途中2回の休憩を入れて、長い階段を昇り切り、梅尾山に 11:15 着。休まず歩いて 11:50 横尾山(274m)に着き、昼食とする。そこで反対方向から登ってきた若い男性から「馬の背は大変ですよ」と忠告された。

その「馬の背」を、鎖を手繰り、岩根にすがって注意深くわたり、13:20 分岐着。ここから右折して下山にかかる。

親切で勉強熱心な台湾青年

ここで笑顔がさわやかな青年と出会った。挨拶を交わして「お国はどちら」と問うと「台湾です」の答。日本語習得のため2年間の留学中とのこと。

この青年、勉強熱心でスマホ片手に問いかけてくる「これは桜ですか」「桜にも種類があるが、桜でいいでしょう」「これは松」「いや楓、モミジの仲間」「あれはモンキアゲハだがアゲハチョウでいいでしょう」などと楽しく語らいながら下る。市街地に出ると先にたつて案内してくれ、14:10 板宿駅着。青年に礼を言い、励ましあって別れた。

←登山道に落ちていたクリの実



シマウマ模様はアブ除けに役立つ

ノーベル賞のパロディ版イグ・ノーベル今年度生物学賞に日本人チームが選ばれ、評判になっている。

研究成果は「シマウマ模様は、アブ、サシバエ除けに役立つ」で、新聞にはスプレーでシマウマ模様にされた黒牛の画像が添えられていた。この模様を施すと、アブの襲来は半減し、アブを追うためにしっぽを振る回数も減るそう。この「実験」を全国各地で行って表記の成果を得たとのこと。

研究成果は畜産業に多大な貢献になると期待されている。研究対象を家畜にとどめず、登山者の悩みも解消できるように発展させてほしい。

夏登山でアブは悩みの種だ。刺されれば痛いし、アレルギー反応のある人は気の毒なくらい、腫れあがる。ひどい場合は腫れで視力が奪われる状態になる。蚊取り線香をぶら下げたり、腕に巻く防除器を持参したりとみんな苦労している。イグ・ノーベル賞授賞式に登壇した日本人研究者は白黒縞模様のシャツを着ていたが、早い時期に登山用グッズに活用できる方途を探りだしてほしい。切なる願いだ。